



白川 凛子  
Rinko Shirakawa

超でっかい!  
98センチ!  
Hカップ!

Extra Extra Extra Extra Extra Extra Libido2

## Extra Extra Extra Extra Extra Extra Libido 2 前編！

### 戦えラブセイバー・リンコ！ ～エッチな下着でラブラブえっち！？～

平和な千代町。

リビドリアンの発生もなく、ただただ日常がそこにあった。

そんな平和な町にあるのが戸田家。

特に理由なく両親は不在。

その家には戸田 鍊太というやや童顔で可愛らしい顔をした少年。

そして、義妹である白髪赤目のスレンダー系美少女の美玲が住んでいた。

その鍊太と、彼の恋人である白川 凜子は休日に2人でデートをしていた。

黒髪で98センチの爆乳にデカケツで凛々しい美人である凜子。

鍊太の一歳上で、家も隣り合っていて幼馴染関係でもある。

ずっと一緒に育ってきた2人は非常に仲良く、恋人になってもその関係は続いていた。

そんな2人はアウトレット内を散策して、ウィンドウショッピングや食事をしながら楽しい時間を過ごしていた。

「む……？ あれは……新しい店が開いているようだな」

「ん？ あ、ほんとだ。時々入れ替えあるよね」

鍊太は私服だけれど、凜子は制服姿。

休日ではあったけれど彼女は登校し午前中に所属する風紀委員の作業、頼まれている部活の指導、ついでに出没したクマをしばいて山へ帰してきたのだ。

その後、待ち合わせをしてデートという運びになっていた。

凜子はきっちりと制服を着ているのだが、その美貌とワイシャツぱっつぱつのデカパイが歩く度に”たゆゆん♥”と揺れるのでかなりえらいことになっていた。

周囲の男からの視線を受けながらも大して気にしない彼女が見つけたのは、最近開店した新規店舗だ。

そこに2人で仲良く向かっていく。

と、言っても手を繋いだりするのではなく並んで仲良く、と言った感じではある。

2人は恋人同士ではあるし、することはしているけれど手を繋いだり腕を組んだりはあんまりしないのである。

あくまでもあんまり、だけど。

「ふむ、服屋か……」

「みたいだね～……っあ……………」

新しく出来た店は服屋。

オリジナルブランドで展開している店で、若い女性客が主な客層のようだった。

それなりの数の女性客が”キャピキャピ♥”しながら買い物をしていて非常に明るい印象の店。

そこに入った凜子は店内を確認するように見て服などを見ていく。

その姿を見つめる錬太は少しだけ躊躇い、だけど覚悟を決める様に――。

「なにか、欲しいものとか、あ、あったりする？ 良かったら、その、ぷ、プレゼント、する、よ？」

――そう凜子に告げた！ ちなみに可愛らしいとも呼べる顔は真っ赤で、耳まで赤い。もう真っ赤。

恋人同士ではあるものの、ずっと姉と弟のような関係で育ってきた錬太。

やることはやっている！

することはしてる！

だけど、どこか昔の関係から脱却できていないのも事実だった。

それを凜子が不満に思っている風はないし、姉御肌で面倒見が良い彼女からしたら鍊太は彼氏でありながら可愛い弟のような存在でもある。

もちろん、男として見ていない訳ではないけれど、片手で除雪車を持ち上げられる凜子からすれば世界人類「可愛いもの」なので仕方ないとも言えるのも確かだった。

それはさておいても、鍊太は常にどこか――。

『凜子姉に男として見て貰いたい！』

――という気持ちがあるのだ。

それはもはや男の本能とか、そんな感じのアレである。

凜子からすれば「もちろん男として見ているぞ？」と軽く答えるだろうけど、その程度なのもまた事実。

それを分かっているからこそ、鍊太は『デートで彼女にプレゼントをする！』的なアピールをしていくのだ。

「プレゼント……？ ああ……………ふふ♥」

そのアピールに一瞬怪訝な顔をして、綺麗な動作で顎に手を当てて首を傾げる凜子。

見た目の美人なら動きも非常に綺麗な彼女。

たまたま近くを通った女性客が「わ、綺麗……」と呟くレベル。

そんな凜子は鍊太の言葉の意図を理解して優しく微笑む。

鈍感でもない彼女。

必死に『彼氏』としてのアピールをしたがる可愛い恋人の想いを受け止めると髪をかき上げた。

「そうだな……♥ セっかくだし、なにかプレゼントして貰おうか♥」

「う、うんっ！ 何がイイ？ 何でも良いよ！」

余裕たっぷり「可愛い奴め♥」的な態度を見せる凜子。

鍊太の『男として見て欲しい』アピールはしょっぱなから失敗しかけている気もするけれど、彼本人は顔真っ赤でやる気に満ちている。

やる気に満ちつつ、チラッと自分のお財布を確認して「バイト代がまだ残ってるから……」とチェックもしていく。

「何でもいいと言われると……そうだな……………♥」

可愛らしく必死さを見せる恋人の姿に微笑みながら凜子は長い髪と、大きすぎるおっぱいを”たっぷゆさ♥”揺らしながら店内を進む。

鍊太はその後をついていき、どうにか男としてのアピールをしようとしていた。

そんな彼を前に凜子は――。

「ふふ……♥ それじゃあ、これとこれならどっちが私に似合うと思う？」

「え？ えっと……………っえ……！ えっと、り、凜子姉……？」

「どうした？ 鍊太？ 顔が赤いぞ？」

――ついつい可愛がりたくなってしまったようでやや際どいランジェリーセットを手に取り見せていく♥

スケスケで色々見えそうで見えない過激な下着♥

その赤と黒、デザインもそれぞれ違うけれど過激なことには違いないそれを鍊太に見せていく。

「い、いや、別に、あ、赤くなってない、けどさ……………っ……えっと……」

「……………♥」

純情で純真な鍊太くん。

エロい下着を直視できずに顔真っ赤で視線を逸らしていく。

本来は他人をからかったり、バカにしたりはしない凜子であるがこと鍊太に関しては別。

からかっている自覚はありつつも可愛がりたくなってしまう気持ちを抑えきれないのだった。

ニマニマと微笑みながら彼女はセクシーな下着を見せていき——。

「ダメか？ それならこんなのはどうだ？ ほら、紐パン……♥ というやつだぞ？ どうだ……？ ほれ♥ ほれ♥」

「っあ……っ……っあっ……〜〜〜っ！」

——他のモノを手にとっては鍊太に見せつけていく。

それにもまた彼は真っ赤になってモジモジしてしまう。

初心で可愛らしいリアクションを見せる鍊太。

その姿に”キュンキュン♥”してしまう凜子は彼に近づいて耳元で囁く。

「……………♥ 私に似合うのが選べないなら、私に着せたいものを選んでくれて良いんだぞ？」

「っえ……？」

普段凜々しい凜子の甘く優しい声にゾクゾクする鍊太。

そこにトドメを刺すように——。

「……♥ するとき、脱がせたいもの、そう思えば選びやすいんじゃないか？」

「〜〜〜〜〜っ！！！」

——誘惑するような囁きをぶちかます！

超美人な彼女のからのその囁きに錬太の顔はもう心配になるほど真っ赤。

月に2回ほどはセックスをする2人。

その際に、凜子は自分で服も下着も脱いで、むしろ錬太の服を脱がせたりすることが多い。

なので、錬太からすれば凜子の下着を脱がすだけでも興奮するのに、そこにセクシーな下着の要素も加われば心臓がドキドキ跳ね上がるのも仕方ない話だった。

「……………じゃ、じゃあ……………こ、これ、とか？」

もう音漏れしそうなくらいの心音を響かせる錬太は震える手で一つのセクシーな下着のセットを選んだ。

と、言ってもそこまで派手なものではなく白のレース主体のモノで、フリルがアクセントになっているセクシーでキュートなものだった。

「ふむ、錬太はこーゆーものが好きなんだな？ ふふ♥」

「べ、別に、好きとか……………そんなんじゃ……………なくて……………えっと……………」

凜子はまだまだ可愛い錬太を可愛がりたいように楽しそうにからかっていく。

それを受けつつ、真っ赤な顔をした彼は凜子がこの下着をつけることを想像して興奮に生唾を飲んでしまう。

「……………っ……………」

「そんなに楽しみか？ スケべめ♥」

「！？」

当然。イルカのエコーロケーションも判別可能な凜子の耳には生唾ゴクン♥の音は届いている。

指摘されてビクッと震える鍊太。

その彼の脇腹を凜子は”つんつん♥”しながらイチャイチャしていくのだった♥

ちなみに、女性客の多い中で女性用の下着を買うのは色々試練であったはずだけど緊張と興奮、そこに追加でからかいなどもあったので混乱しきった鍊太は半ば茫然自失状態だったおかげでスンナリ購入出来ていた。

――。

――。

「……………っ……！」

デートから数日後。

金曜日の夜の戸田家。

鍊太の部屋。

そのベッドの上でシャツに短パン姿の湯上り鍊太は顔真っ赤で座っていた。

何故顔真っ赤かというと、風呂上りと言うことも差し引いても今日が『セックスの日』だからだ。

別に明確にこの日と決まっている訳でもないし、凜子が「エッチは月に〇回までだ！」と言っている訳でもない。

しかし、夜更かししても良い日か、体力は問題ないか。鍊太の精力や性欲の状況、そして彼の義妹の美玲が在宅か否かなどの条件から――。

『セックスをするのは次の日が休みで、美玲がお泊りしている日』

———となっていた。

もちろん絶対ではないけれど、その日が多いというのは確かだった。

そして、今日は絶好の機会とも言える日。

美玲は何やらお友達とお泊り会をするというので家におらず、明日は土曜日で休み。

つまり。

今日は。

完全にエッチする日！！！！

凜子と鍊太は明確に「今日エッチしYO！」と約束は普段しないけれど、なんとなくの空気感であることを察していた。

夕飯の後からお互いに何となく無言になり、どちらからともなく一度入ったお風呂にもう一度入り身を清める。

そして、鍊太が部屋に戻りコンドームのチェックなどを済ませてベッドに座って待っている———。

”コンコン”

「！ ………り……………んんっ！ 凜子姉？ あい、開いてるよ」

———部屋にノックが響いた。

どこか遠くで聞こえる犬の遠吠えの声を無意味に記憶しながら、鍊太は声をかける。

それに応えて凜子が部屋に部屋に入る。

いつもの流れだ。

そして鍊太は緊張の中で超美人でおっぱいデカイ彼女を迎えるんだけど———。

「なっあ……！ ……っあ……っえ……あ、り、りり、凜子姉……っっ♥」

「ふふ……♥ どおした……鍊太♥」

——入ってきた凜子を見て固まってしまう。

ベッドから立ち上がりかけの微妙な姿勢で固まってしまった鍊太の視線の先には凜子。

凛々しい美少女で超美人♥

98センチのHカップのデカパイの持ち主♥

その彼女が——。

「お前が買ってくれたものだろう？ これは♥」

「~~~~っ……！」

——セクシーな白のランジェリー姿で立っていた。

長く綺麗な黒髪と対比するような白のセクシーランジェリー♥

いたるところが透けていて、大切なギリギリはフリルで隠れているめちゃくちゃエロいの可愛いそれ♥

それを前に鍊太は完全に固まってしまう、顔真っ赤で口パク連続。

その彼に凜子は一歩、二歩と近づいて行き、デカパイを”たっぷゆっさん♥”揺らし——。

「脱がしたかったんじゃないのか？ ふふ♥」

”たっぷん♥”

——爆乳の下に腕を挟み込んで揺らして見せつけまでしていく♥

「っあ……っあ……わ……っあ……」

ただでさえ美人な凜子。

ただでさえの爆乳。

ただでさえスタイル良すぎる彼女の身体を飾るセクシーな下着。

それを前に錬太はもう行動不能状態に陥っていた。

「すご……っあ……………」

「錬太がプレゼントしてくれたものだからな？ 活用しなくては、な？ ふふ♥」

固まってしまっている錬太を前に見せつけている凜子。

胸を揺らし、腰をくねらせてその素晴らし過ぎる身体をアピール♥

エロさに極振りしたようなその姿に錬太は真面目に数分間何も言えずにいたが——。

「……………さすがにそろそろリアクションをしてくれるとありがたいのだけれど？」

——そう凜子に言われてぎこちなく動き出した。

と言ってもただでさえ美人で爆乳な凜子がエロく飾りつけられている状況なのでどうして良いかもわからないようだった。

顔真っ赤な錬太は手を伸ばそうとしてはやめてを繰り返していた。

そんな可愛い姿を見て凜子は小さく微笑むと——。

「なんだ……？ 着たままが良いのか？」

——なんて挑発的な視線を向けた。

それがまた錬太にはクリティカルヒットしていくのだった。

凜子は凜子でそんな錬太のリアクションが楽しいようでベッドに腰掛けてそのエロい下着を見せつけていく。

「このまま……♥ してしまう、か？」

普段はお互いに裸になってが基本の2人。

それは清い交際であると同時に、錬太がそうしたいと言うからだ。

ベッドに座った凜子に近づいた錬太は興奮しながらも真っすぐな視線で告げた。

「……………ぬ、脱いで、しよう……その、え、エッチは遊びじゃない、から……」

「……………♥♥♥」

あまりにも真剣で真っすぐで純粋な言葉。

それに凜子は”キュンキュン♥”しまくってしまう。

どこまでも自分を大切にしてくれて、それでいて『真剣交際』を頭に入れている錬太。

そんな彼に凜子は惹かれているのだ♥

「それじゃあ……脱がしてくれ♥」

「っ……！ う、うん……………っ……」

普段は脱がすことなどない錬太。

ほとんど初体験。

ブラを外し、溢れ出す様に震えたデカパイに興奮し、生唾を飲みながらも下を脱がせる。

興奮でクラクラしてしまうような状況ながらも脱がせ終わったら、錬太も服を脱ぐ。

細いが、それなりに筋肉のついた美しい身体を晒して男らしく自分からのキス♥

「凜子姉……ん……ちゅ……んんっ……」

「っあ……♥ れろ♥ 錬太……あ♥ ん、ちゅう♥」

お互いに裸での優しいキス。

舌を貪りあうようなものではなくて、唇を合わせて優しく挨拶するように舌を擦り合わせていく。

「はあはああ……れろ……ん♥ れるう♥ 錬太……♥ ん♥」

裸同士の触れ合い。

普段は木刀で摩周湖を割るくらい容易い凜子の身体なのだけど、かくも柔らかくしなやか。

肌も滑らかで擦れるだけで錬太は興奮してしまう。

勃起してしまっているおちんちんはカウパーを漏らし、普段以上の興奮を見せていた。

「凜子、姉……はあはああ……ちゅう……」

「っあ……ん♥ ちゅう♥ れろ♥」

興奮しきった錬太は凜子を押し倒す形でキスをしていく。

普段以上に舌を擦り合わせてお互いの唾液を混ぜ合わせる。

お互いに熱い息を漏らして、視線を絡ませ合わせると錬太は我慢しきれない様で用意していたコンドームをつける。

「ん……♥ いいぞ……♥ いつでも♥」

「はあはああ……はああ……っ！」

勃起した錬太のおちんちん。

それを前に凜子はむっちりめの足を広げておまんこを見せつけていく。

整えられたアンダーヘアの下のおまんこ。

そこに鍊太はおちんちんを押し当てて、体重をかけるように挿入。

”ぬっぷ♥ ぬぶ……っぷ♥”

「っう……っあ……っ！ っ！ はあ……はあ……っ！ んんんっ！」

「鍊太……♥」

コンドームつきのおちんちんは凜子のおまんこに飲み込まれていく。

しっかりと根元まで挿入してそこで呼吸を整える鍊太。

そして、準備が出来たらピストン開始だ。

「凜子姉……っえ……っ♥ っ！ んんっ……！」

ベッドを軋ませながらのピストン。

コンドーム越しに感じる凜子のおまんこを感じるように引き抜いて、挿入。

”にゆるうう……ぬっぷ♥”

「っあ……♥ ん♥ 鍊太、きもちーぞ？ ……ん♥」

おちんちんが挿入され、ベッドを軋ませながら鍊太は体重をかけていく。

ピストンの度に凜子のHカップの爆乳は”たぷっ♥ たぷ♥”と揺れてエロさをアピールしていきようだった。

そして、腰を振り、時折動きを止めながら——。

「っあ……！ っ……！」

”びゅる……っ♥”

「ん……♥」

——鍊太は射精した。※所要時間44秒。  
ビクビクと震えながらコンドームへの射精。  
精液を漏らすように吐き出しながら身体を震わせる。  
それに凜子は微笑みを見せて、あやす様に彼の頭を撫でた。

「気持ち良かったぞ……♥ 鍊太♥」

「はぁはぁ……っぁ……はぁ……っ！」

優しく、褒めていく凜子。  
余裕なく快感の余韻に息を荒げる鍊太。  
その後、2人は優しいキスをしていくのだった。  
何度も、何度も触れ合わせるようなキス。  
言葉もなく、何度も、唇を合わせていく愛を確かめるようなそんなキス♥

**Extra Extra Extra Extra Extra Extra Libido 2 後編！**  
**戦えラブセイバー・リンコ！ ～自己満？ コスプレ？ 浮気に通話！？～**

【AM7：08】

「凜子姉……ちゅ……ん……♥」

「ん……ちゅう♥ れろお……♥」

休日の朝。

制服姿の凜子は戸田家の玄関で鍊太とキスをしていた。

部活、その他学校でやることのある為に凜子は休みの日も頻繁に登校していた。

今日もそうであり、今しているのはある意味『いってきますのチュー♥』だ。

凜々しい黒髪ロング美少女である凜子の優しいキス。

恋人である鍊太はそれを受け止めながら顔を真っ赤にしていく。

「ぶは……………それじゃあ、終わったら連絡するから……♥ そしたら、デート、だな？」

「はあはあ……う、うん……………♥」

キスを終えた凜子は髪をかきあげて良い香りを漂わせる。

そして凜子が学校でのアレこれを終えた後のデートの約束。

色々と多忙な凜子ではあるが、恋人との時間は大切にしたいのだ。

普段からほとんど一緒に暮らしているような関係ではあるけれど、しっかりと彼氏彼

女として意識する行為をしようとしていた。

それは愛であると同時に、鍊太自身が時折『僕は凜子姉に相応しい男なのだろうか？』と不安になっているのを察しているのもある。

しっかりと恋人同士なんだぞ？と凜子からもアピールする為にもデートは大切なのだ。

お互いがお互いを思い合う。

そんな素敵な関係である2人。

凜子は「期待してるぞ？」などとからかうように告げて家を出たのだった。

――。

――。

【AM7：45】

「はっあ……っあ♥ ん♥ んんんっう♥」

ある店内で甘い声を漏らす凜子。

彼女がいるのは所謂アダルトショップ♥

24時間営業で、エロい道具やAVが並びに並びまくる店だ。

そこに制服姿の美少女がいると目立ちまくっていた。

これが鍊太のデートコース？

そんなことはなく――。

「凜子ちゃん先輩のおっぱいほんっとでっかいよねえ♥ んひひ♥ 何カップだっけえ、これ？」

「……………H、カップ……♥ んっ♥」

——彼女の隣にいるのは肥満体のキモオタクである。

名前は『増田 孝行 (ますだ たかゆき)』

年齢は凜子の一つ下で錬太と同じ、そして同じく千代ロマンス学園高等部に通う男子生徒である。

その彼——孝行——タカユキは堂々と凜子の肩を抱いて両手でおっぱいを”もみゅ♡”と揉みまくっていく。

肥満体の指で揉まれて形を変えるおっぱい♡

その刺激に凜子は綺麗な顔を赤く染める。

タカユキと凜子の関係は一言でセフレ♡ である。

しかも、セフレと言っても——。

「っあ、あまり、店内でこういうことはしないで、くれ……♡ 人にみられて——”ぐにいいっ！”——きゃひいい♡♡」

「あれえ？ どおしたのかあ？ ……あ、先輩って言っちゃったから勘違いしたのかなあ？ 『凜子♡』、敬語はあ？」

「……………ごめんなさい……♡」

——タカユキの方が立場が上である♡

年下相手に敬語を使う凜子♡

乳首を服越しに抓られて、その痛みにさえ感じてしまい甘い声を漏らしながら店内を歩く。

色々あってセフレ関係になった凜子とタカユキ。

凜子は今日は本来学校での用事はなく登校する必要もなかったのだが、タカユキに呼び出されていたので錬太にはウソをついて会いに来ていた。

セフレ関係になり、最初は『学校でも人気な超美人な先輩！』である凜子とのエッチに満足していたタカユキ。

しかし、繰り返していくうちに凜子のマゾさを理解して、自分の傲慢さを出していつて今にいたる。

タカユキはチラチラと自分たちの方を見てくる店内の客に見せつけるように凜子のデカパイを揉んで行く。

めっちゃ美人でおっぱいの大きい凜子を自由にできることを見せつけるように♥

「にしても凜子も酷いよねえ？ 彼氏にウソついて僕に会いに来るんだからさあ？  
ねえ♥ んひひ♥」

「……っ……」

声も大きく。

わざと周りに聞かせるようにタカユキは喋る。

周りに――。

『このめちゃくちゃ美人なデカパイちゃんは彼氏がいるのに会いに来ている』

――とアピールして自分の価値を見せつけるように。

実際はタカユキが連絡して凜子が呼び出された形なので微妙にニュアンスは違う。

だけど、そこを指摘することはせずに凜子はおっぱいを”むにゅ♥”と揉まれながら熱い吐息を漏らして――。

「た、タカユキ、さんに、会いたくなってしまったので……♥ 彼氏に、嘘ついて……来ました……っあ♥」

―――相手が望むような答えを告げる。

言いながらその行為自体にも凜子は感じてしまう♥

腰をくねらせて、”むにゅたゅ♥”デカパイを揺らしながら甘い息を漏らしていく。

「っあ……♥（鍊太に、嘘ついて……♥ こんなことをしに……♥）」

恋人には用事があると言って出て来たのにやっているのは浮気♥

その事実には凜子は興奮してしまう♥

ちなみに、タカユキは鍊太と険悪な仲でもない。

と、言うか同じクラスではあるが交流がそんなにあるわけでもないのだ。

しかし、タカユキからしたら鍊太という少年は見た目も良く女子に人気。

運動も出来るし（凜子に鍛えられた）勉強もできる（凜子に教えられた）

その上で友達も多く、めちゃくちゃ可愛い彼女と、めちゃくちゃ可愛い義妹がいるのだ。

嫌な奴ではないけれど嫉妬の感情は浮かんでしまうというもの。

なので、その思いを発散するようにして凜子を弄んでいくのだ。

『お前の彼女はお前にウソついて僕に会いに来てるんだぞ！』

そんな思いを滾らせながら凜子のデカパイを揉んで行く。

「そう言えばさあ、凜子お♥ この前の彼氏とのデートでエロい下着買って貰ったって言ってたよねえ？ あれ着けてエッチしたの？」

「え？ あ……………は、はい♥ 一応……つけてとというか、するときは、脱ぐように言われました、けど……エッチは遊びじゃない、からって……♥」

「……………ふうん♥」

年上の凜子に敬語を使わせながら鍊太とのイチャラブを聞いていくタカユキ。

気に食わなそうな顔はしていきながらも、何か思いついたのか足をコスプレ衣装のコーナーに向けた。

そして、凜子のデカパイを揉みながら――。

「んひひ♥ これ♥ 僕から凜子にプレゼントしてあげるよお♥」

「っえ?! これ……っあ……♥」

——まるで錬太に対抗するようにプレゼントをすと言い出し、ある衣装を指さした。

ちなみにプレゼントするなんて言いながらもタカユキは財布を出す気はなくて凜子に買わせる気満々である。

そして凜子はタカユキが選んだコスプレを見て顔を真っ赤にしていくのだった。

——。

————。

【AM8：27】

「ほらあ、着替えたら出てきなよお? 凜子お♥」

安いラブホテルの一室。

アダルトショップデートを終えてそのまま移動したのだ。

当たり前のようにここの払いも凜子持ちだ。

そのラブホテルのベッドに腰掛けて、既に全裸でチンポ勃起させながらタカユキは一応付属しているシャワールームの脱衣所で着替え中の凜子に声をかける。

その声に応えるように脱衣所から出て来た凜子は——。

「こ、これ、ん、なんだか、恥ずかしいんだが……♥」

——トリックでトリートメントなコスプレ姿♥

全身てっかてかの素材で超ミニスカート♥

ほとんどおっぱい丸見えの緑と赤のビキニ♥

そして帽子とテカテカニーソの所謂『コンドーム婦長』スタイルのコスプレ♥

それをしているのが黒髪ロングでデカパイ美少女ならば興奮も凄まじいものがある。

顔を真っ赤にしながら見せるために出しているとしか思えない服に戸惑う凜子。

それを見てタカユキはチンポをビクビクさせながらも興奮していく。

「いいねえ♥ めっちゃくちゃエロいねえ♥ 凜子のドスケベな身体にぴったりだよお♥」

「っあ……撮るな……っ♥」

興奮しまくりのタカユキはスマホで撮影していく。

それに顔を隠す凜子だけど——。

「撮るな？ なあんで命令口調なのかなあ、凜子お♥」

「っあ……！ ご、ごめんなさ——”ばしんっ！”——んっあ`♥」

——タカユキは敬語を使わなかったことを咎め、近づくと彼女の大きなお尻を引っぱたいた♥

デカケツを叩かれた痛み。そこからくる快感に凜子は下品な声を漏らしながら足を震わせる。

「はあはあ……♥ ごめんな、さい……♥ タカユキ、さん……っあ♥」

「んひひ♥ 立場はしっかりねえ？ ほら、ポーズと取ってポーズ♥」

「は……い……♥」

敬語を使わせて、言いなりになる凜子の姿に満足しながらタカユキはポーズの要求。  
それに凜子は応えて、慣れないながらもセクシーポーズを撮りまくり♥

「いいぞお♥ いいぞお♥ そこらのレイヤーなんて目じゃないねえ♥ ほらあ、デカ  
ケツこっちに向けろよお♥」

「はあはあ……♥ はい♥ こ、こう、ですか？」

「おっほ♥ えろすぎ♥」

美少女のエロコスに興奮しながらスマホで撮影しまくるタカユキ。  
そして十分に撮影したら本番エッチタイムだ♥

「んひ、ほら、ベッドに寝て♥ 普段、彼氏としてるときみたいにさあ♥」

「……………はい……♥」

タカユキは錬太がしていることを模倣するのが好きだった。  
今回のアダルトショップデートもそれにあたる。  
凜子は言われるがままにベッドに乗って足を広げる。  
むっちりした足の間♥  
そこにはエロくテッカテカな下着♥  
既に濡れているまんこを隠すには不十分なそれを見せつけていく。

「んひひひ♥ いいねえ♥ ほらあ、下着もずらして♥」

「はい……♥ つあ……♥」

下着をズラした途端に溢れ出すマン汁♥

一気にベッドシートにまで垂れるほどの量♥

アダルトショップデートと撮影だけで興奮して濡れたとは思えないほどの大量のマン汁を垂らす。

そこにタカユキは鼻息荒く当たり前のようにコンドームをつけないチンポを押し当てていく。

”ぬちゅう♥”

「っあ……♥（相変わらず、おっきい……♥ 鍊太のよりずっと、大きい♥）」

チンポを押し当てられただけで無意識に彼氏のおちんちんと、タカユキのチンポを比べてしまう凜子。

そしてタカユキがじっくりゆっくりとチンポを挿入していくと――。

「んっあ♥ っあ♥ んんんっ♥（っあ♥ あ♥ すご♥ 凄っい♥ 深くまで、っあ♥ 鍊太がこれるところ、越えて、っああああ♥）」

「んひひひ♥ 締め付けすっごお♥ めっちゃ痙攣してるしい♥ 凜子お♥ ほら、いつもの言えよお♥」

「っあ……っえ……っ……っ♥」

――鍊太との比較をしてしまいながら声をあげる凜子に『いつもの』を要求する。

それに彼女が一瞬躊躇うと、タカユキはチンポの挿入を止める。

鍊太が届く場所よりやや深い程度の位置だけど、タカユキのチンポはまだ奥を狙えるので途中も途中だ。

そんな位置で止められてしまえば疼きが強くなっていくのを凜子は感じた。

「んひひ♥」

”むにゅ♥”

「んっあ♥ っ♥」

タカユキは何も言わずに、コンドーム婦長コスプレ姿の凜子のデカパイを揉んで行く。  
指を食い込ませておっぱいを揉みながらチンポを震わせる。  
その状況でほんの20秒ほどの沈黙の後に凜子は――。

「か……彼氏じゃ、全然届かない、おまんこの奥……♥ タカユキさんのおちんぽで……♥ し、舐けて、ください……♥」

「んひひひひ♥ よくできました♥ っとお♥」

――エロいおねだりをしてしまう。

それを聞いて優越感と満足感に笑みを浮かべたタカユキは凜子のコスプレデカパイを揉みながらチンポを深く、深く、”どちゅっ♥”と挿入♥

「っあ！ っああ♥ んっあ♥ ふかつあ♥ っあ♥ っああああ♥ 奥、っあ♥ 鍊太のおちんちんじゃ届かない、場所、っあ`♥」

愛する彼氏が触れたこともない凜子のおまんこの奥。  
そこをタカユキのチンポはあっさり侵入して刺激♥  
もう慣れた動作で何回も何回もピストンし、ベッドを軋ませる。

「んひ♥ ラブラブの大切なエッチは彼氏とするもの、だもんねえ♥ んひひ♥ 僕はあ、はあはあ、コスプレさせてえ、適当にお遊びえっちするよお♥ いやあ、彼氏の戸

田くんが羨ましい、ねえ、ふひ♥」

「んんんっ♥ つぁ♥ お、お遊びエッチ、つぁ♥ おちんぽ、きもち、良すぎっ  
♥ んっぁぁぁ♥」

お互いに全裸で愛し合う本気のエッチは恋人と。

自分がしているのがコスプレさせてのお遊びエッチだと言いながら腰を振るタカユキ。

そのお遊びエッチの快感に凜子は余裕なく声を漏らす。

「はぁはぁ♥ つぁ♥ そ、そこ、だめっえ♥ つぁ♥ た、タカユキ、さん♥ つ  
ぁ♥ おちんぽ、は、はげひっいです♥」

「んひ♥ ふっお♥ お遊びエッチに、そんなに感じてたら、ダメだろお、凜子お♥ ほ  
れ♥」

”ずっぷ♥”

「ひゃうううう♥♥」

お遊びエッチ♥

しかし、錬太相手にしているときとは声も感じ方もまるで違う凜子♥

チンポに支配されているかのようなレベルで声を漏らして身体を震わせていく♥

デカパイも”ゆっさ♥ ゆっさ♥”揺らして、マン汁の量もどんどん増える。

タカユキが腰を振る度に”じゅっぽん♥ じゅぽ♥”とフェラでもしているかのような音が響いていく。

締め付けの良すぎるまんこの快感♥

錬太は1分ももたないが、タカユキはそうではなく激しく腰を振り続けていく。

「んひ♥ このデカパイもお♥ おまんこの良さもロクに知らないなんてっえ、彼氏くんはバカ、だよねえ♥ ふーふー♥」

「そ、そんな、ことはっあ♥ んっあああ♥ おちんぽ、い♥ いい♥ っあ♥ だめええ♥ そんなに、っい♥ 激しく、っあ♥」

恋人をバカにするようなことを言われれば反論しようとする凜子けどチンポの気持ち良さには負けてしまう♥

デカパイを揺らして、それを揉まれながらのセックスの気持ち良さ♥  
生のチンポ、鍊太じゃ絶対に届かない場所を可愛がられる快感♥

「はっあ♥ っあ♥ っあああ♥ (だめ♥ 本当に駄目に、なる、これ♥ 子宮を刺激されて♥ だめ♥ 鍊太が触れてない場所、なのにい♥)」

恋人のことを思いながら身体を痙攣させて小さな絶頂を重ねる。

痙攣するおまんこの快感を楽しみながらタカユキは太いチンポで子宮を突き上げる♥

”どちゅ♥”

「ふにゃっあ♥ っあ……かは……っあ♥ そ、それ、だ……めっえ♥」

突き上げるようなチンポの刺激に口をパクパクさせる凜子♥

もう気持ち良さの虜になってしまい、マン汁も溢れ出していく。

「なあにがダメ、なのかなあ？ ん～？ こんなのお、お遊びエッチだろお？ 恋人の本気エッチに比べたら全然だよねえ？ れろお♥」

「っあ……♡ ん、ちゅ♡ っあ♡ れろお♡ じゅるるう♡ (きす、だめえ♡ ふわふわして……っあ♡)」

「ぶちゅるるるう♡」

陥落しまくりな凜子の身体の密着するように肥満体を倒して、タカユキはキスをする。凜子と錬太がしているような優しいキスじゃなくて、舌と舌とを絡ませて唾液を飲ませる、支配するようなキス♡

その激しいキスに——。

「〜〜っい♡ (イクっ♡ だめ♡ チューしながらのエッチ、だめ♡ こんな、エッチなコスプレしながらのエッチなのに、イク♡ イクっうう♡)」

——凜子はあっさり本気イキ♡

身体を痙攣させるイキっぷりを楽しみながらタカユキは腰を振る♡

チンポで何度も、激しく何度も子宮を叩いて——。

「ちゅじゅれろお♡ ふふう……♡ それじゃあ、んひひ♡ 出してあげるからねえ？ っお……♡ お遊びエッチの射精を、ねえ♡ ふっう！」

「はあはああ♡ っあ♡ ありがとうございますふっう♡ っあっあああ♡♡♡」

——”びゅるるるるっうう！”と激しく、一気に、容赦なく♡ 凜子のおまんこに射精していく。

射精に合わせて、タカユキは分厚い唇で凜子に再びのキス♡

それを受け入れながら彼女は、テカテカニーソの足を彼の腰に回しながら——。

「ちゅじゅるるう♡ れろお♡ じゅるるう♡ (イク♡ イクイク♡ イクうううう♡ 完全に脳みそ融けっちゃって、っあ♡ おまんこ、子宮♡ 完全に負けっちゃって

る、これ♥ んっああああ♥)」

——激しく中出し絶頂をしていくのだった♥

既に頭の中には錬太のことなんて残っていないような激しきで絶頂をしていく。

——。

—————。

【PM2：15】

「……………あ、もしもし凜子姉？ まだ、かかりそう？」

昼を過ぎて午後の戸田家。

普段なら昼には学校での作業を終えているはずの凜子から連絡がこないことを不安に思った錬太は電話していた。

『っあ♥ ん♥ っあ♥ す、すまな、い、少し、野暮用、でな……っあ♥』

「ん？ なんか、電波遠い？」

『んんっ♥ そ、うかも、知れな、ひっい♥ っあ♥』

電話先の凜子は何やら忙しそうにしており、かつ電波も悪いようだった。多忙な彼女に無理をさせてはいけないなど、錬太は考えていくのだった。デートはいつでも出来るんだし、ワガママを言う訳にはいかない、と。そんな風に心優しい彼は思っている——。



——。

————。

「んんんっう♥ っえ？ あ、い、いや、少し、手こずっていて、っあ♥」

——裏では当然のように浮気セックス中の凜子♥

未だにラブホでタカユキとエッチしまくり♥

コスプレ姿で汗だくで、今は電話しながらタカユキの上に乗ってガニ股騎乗位をしている最中だ♥

蕩けた顔♥

デカパイの谷間には『牝豚』

お腹には『浮気ビッチ♥』

太ももには『チンポ free』

そんな落書きまでされて『お遊びエッチ♥』を叩きこまれていた♥

腰を振ってデカパイを揺らしながら声を漏らし、恋人との電話をしていくまさにメス  
ブタ浮気ビッチちゃん♥

「はっあはっあ♥ っあ♥ ん♥」

「んひひ♥ 喘いでないでしっかり連絡してあげなよお♥」

「そ、っあ♥ それは……っあ♥」

何度も中出しされて10回以上もイカされてる凜子♥

既にチンポに陥落している彼女は、タカユキの命令で『デートを拒否』するように告げろと言われていた。

その為に今錬太と電話しているのだ。

「はあはあ♥ す、すまないが、っあ♥ 今日のデートは、っあ♥ キャンセル、させて、くれ……っあ♥ っあ♥」

震えながら錬太に約束を守れないことを告げる。

その凜子のおまんこをタカユキは下から突き上げて追い詰める♥

既にイキまくって、今も小さく絶頂し続けているおまんこを虐める様に”ずぶずぶ♥”と刺激♥

それに凜子は声を漏らしてしまうが、必死に耐えていく♥

「くひっい♥ っあ♥ っう♥ (声、漏れるっ♥)」

「んひひ♥」

耐えていくが、タカユキのチンポの突き上げに耐え切れなくもなってしまう。

快感に声が震え、イキ声が漏れそうになったとき凜子は――。

『うん、わかったよ。凜子姉も無理しないでね?』

「っあっ♥ ～～っ♥ ちゅ……じゅる♥ れろお♥」

——恋人の声を聞きながらタカユキにディープキスをしていく♥

ピストンを緩めて欲しかったらキスをしろと言われていたので必死にキスをしてお情けを漏らしながら絶頂♥

そこに鍊太の優しい声を聞いていくという、脳が混乱しそうな状況に身体を震わせていく。

『僕は気にしてないから、ね?』

「んっう……ちゅじゅる♥ じゅるるるうう♥ (鍊太の声、聞いている最中なのに♥ っあ♥ っああああ♥)」

耳元では鍊太の優しい声♥

そこに、タカユキはチンポを震わせながら何度目かの中出し射精をかます♥

彼氏持ちのコスプレ美少女のおまんこに、恋人との電話をさせながらの中出し♥

「ふっひい♥ これ……さいっこお♥」

「んっあ♥ はあはあ……っあ♥ っ♥ ～～～っ♥」

中出しを受けながら凜子も追い絶頂♥

彼氏持ちの美少女を弄ぶようなその行為はタカユキの自尊心を満足させまくっていく。

恋人としての大切な関係すらもセックスの玩具にされていきながらも凜子はデカケツを震わせて、快感に震える♥

そして、通話を終えたスマホをベッドに雑に投げて腰をくねらせていく。

優越感含めた色々な感情を楽しむタカユキのチンポをおまんこで締め付けながら——。

「はあはああ……♥ こ、これで……♥ もっと可愛がって、くれるんです、よね？」

「んひひひ♥」

———錬太とのデートよりも浮気エッチを優先したご褒美をおねだりして行くのだった♥

その浅ましい姿にタカユキは興奮し、その日は夕方まで延々と凜子を犯して行くのだった♥



\_(:3)∠)\_ <いつもご支援マジ感謝！ という名の自己満です！